

あみだじ 阿弥陀寺遺跡発掘調査現地説明会資料

令和5年(2023年)10月8日(日) / 公益財団法人滋賀県文化財保護協会

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages

遺跡と調査の概要

遺跡の概要 阿弥陀寺遺跡は近江八幡市北津田町・島町に所在する遺跡です。その名の由来となった阿弥陀寺は平安時代に建立された寺院で、『日本三代実録』・『大嶋・奥津嶋神社文書』などによると、貞観7年(865年)に大和・元興寺の僧賢和により奥津嶋神社の神宮寺(神仏習合思想に基づき、神社に附属して建てられた仏教寺院や仏堂)として創建されました。また、それらの文書には東谷・西谷・北谷に坊群があった、との記述があります。中世には多くの坊があり、伊崎寺(近江八幡市白王町)を中心とする天台回峰行のルートにも組み込まれていて、天台宗の重要な行場とみなされていました。しかし、延暦寺が焼き討ちされた元亀2年(1571年)に織田信長による焼き討ちをうけて衰微したと伝えられています。

現在の阿弥陀寺は、江戸時代に再建された臨濟宗の小さな本堂と山門が残るだけですが、その周辺には山麓にむけて直線的に道がのび、その左右に複数の平坦面がひな壇状に展開しています。さらに、北や東の谷筋にも、直線道と多数の平坦面群からなる同様の施設が確認できます。おそらく、これらが上記の「西谷」・「東谷」・「北谷」に相当するのでしょう。今回の調査地は「北谷」に含まれることになります(図2)。

調査の概要 公益財団法人滋賀県文化財保護協会では、滋賀県東近江土木事務所が計画する堂川補助通常砂防工事に伴う発掘調査を昨年(2022年)11月より実施しており、現在も調査継続中です。

昨年度の調査では、土石流の痕跡や江戸時代の石積などを確認しました。今年度の調査では、複数の石積・石垣を確認しました。そのうち、石垣の一つでは、崩落した裏込め石の間から15世紀末～16世紀前半の土器・陶磁器などが出土したことから、戦国時代(約600～500年前)の石垣と考えられます。

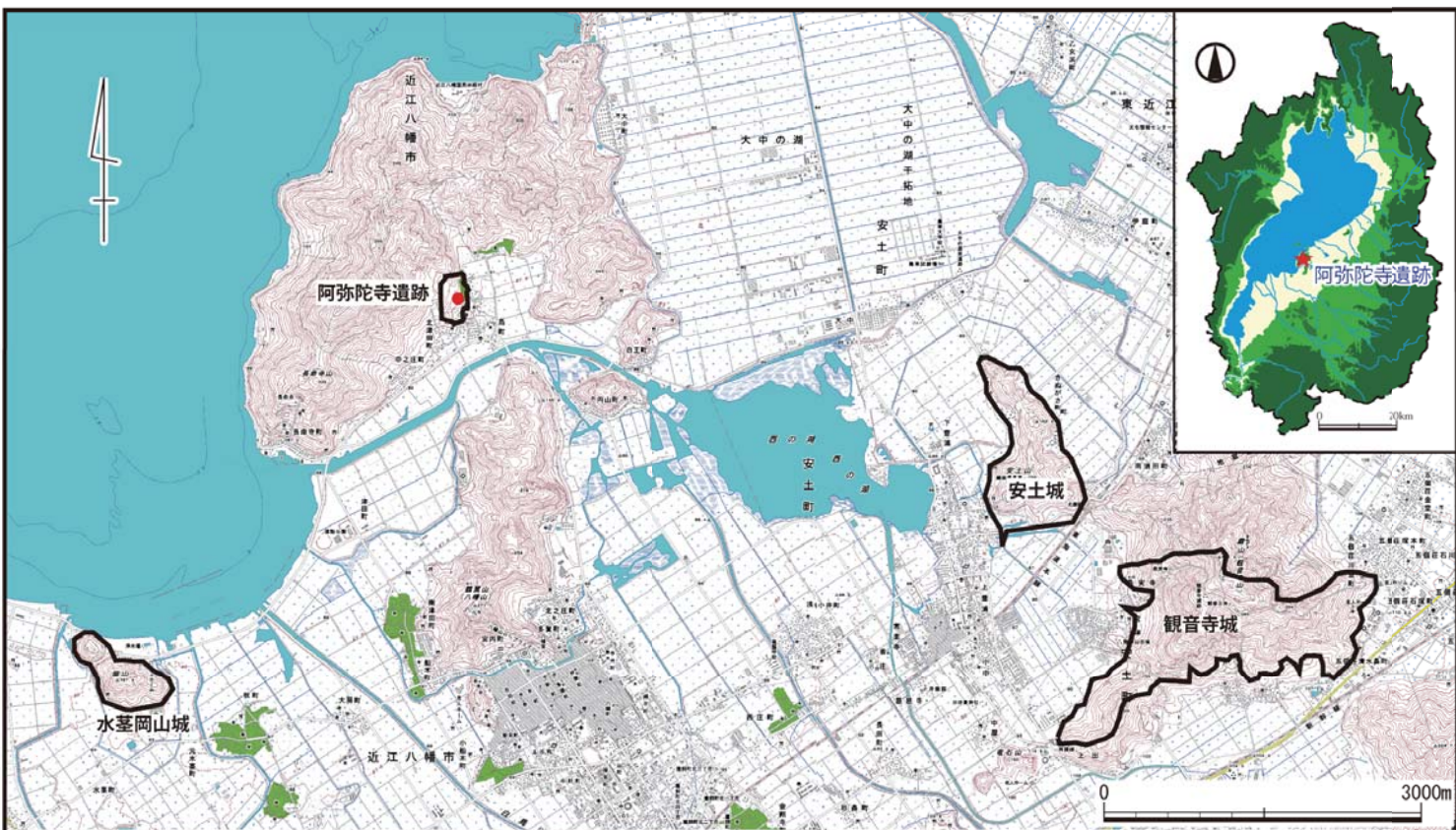


図1 阿弥陀寺遺跡(黒枠)・今回の調査地点(赤点)と周辺の関連遺跡

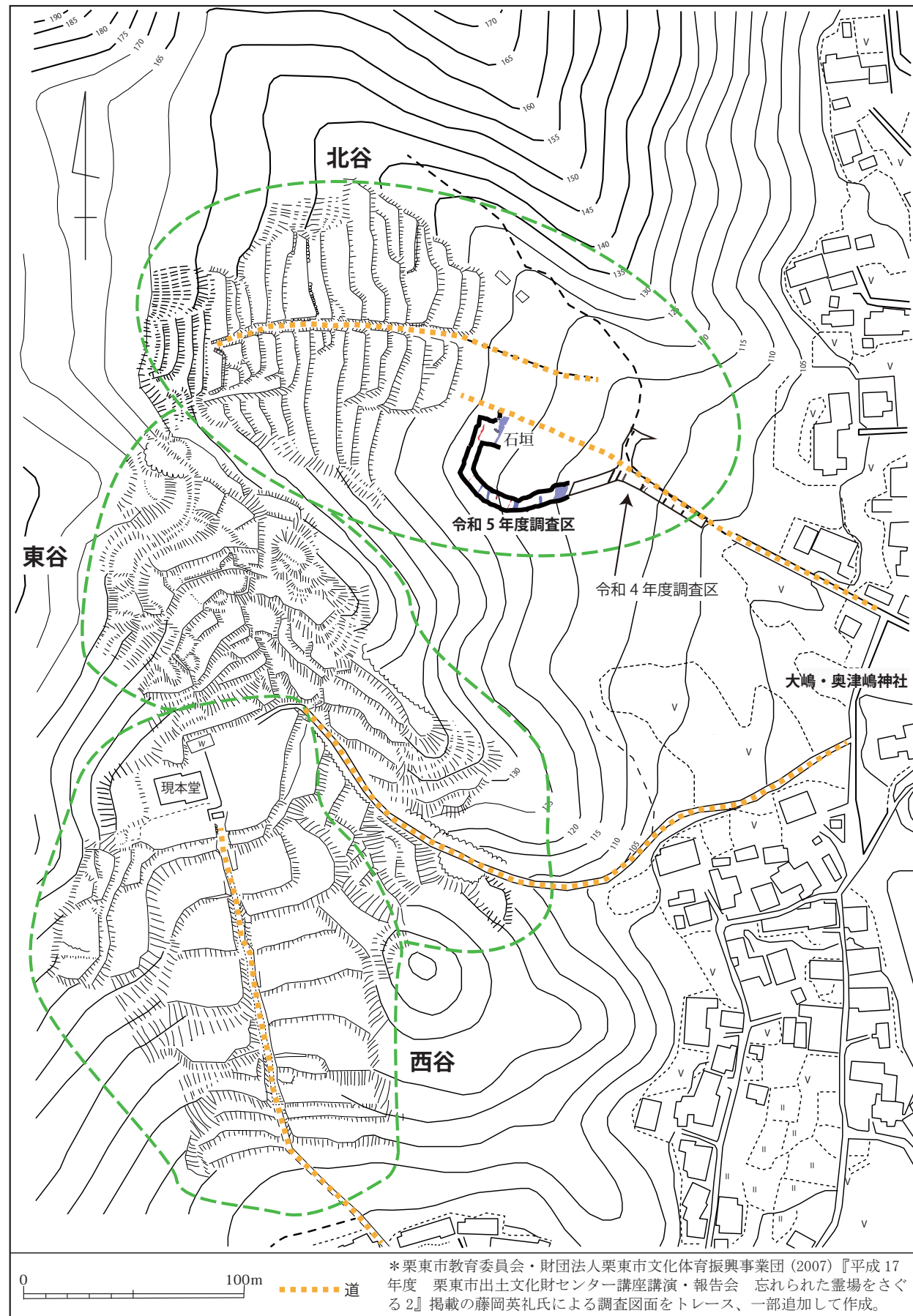


図2 阿弥陀寺周辺の地形

阿弥陀寺遺跡の構造

平安時代の創建とされている阿弥陀寺ですが、これまでの調査では平安時代の遺物や遺構は確認できていません。記録にある「東谷」「西谷」「北谷」は、それぞれ左図の場所に比定されています。

西谷には現在、弥陀寺の本堂があり、そこから南の山麓にむけて道路が直線的にのび、その左右に複数の平坦面がひな壇状に展開します。これは中世山岳寺院によく見られる形態の一つです。

一方、東谷と北谷でも、大嶋・奥津嶋神社につながる道沿いに石垣を伴う平坦面群が展開しています。

このように一つの寺院において、本堂とそこからのびる道路、その左右に展開する平坦面群、という単位が複数存在する例は多くありません。

そして、このようなあり方は、西谷・東谷・北谷がそれぞれ独立的・対立的だった可能性が考えられます。

見つかった石垣

この石垣は、高さ約1.5mをはかるもので、幅約14mにわたり検出しました。上下の平坦面間の段差に設置されています。石垣は最下段の基底石が残っていましたが、それよりも上部の石材は失われ、背面に施された裏込め石が見えた状態でした。これら裏込め石の間から、15世紀末～16世紀前半の遺物が出土しており、石垣の施工時期をしる手がかりになりました。



写真1 見つかった石垣



写真2 横から見た石垣

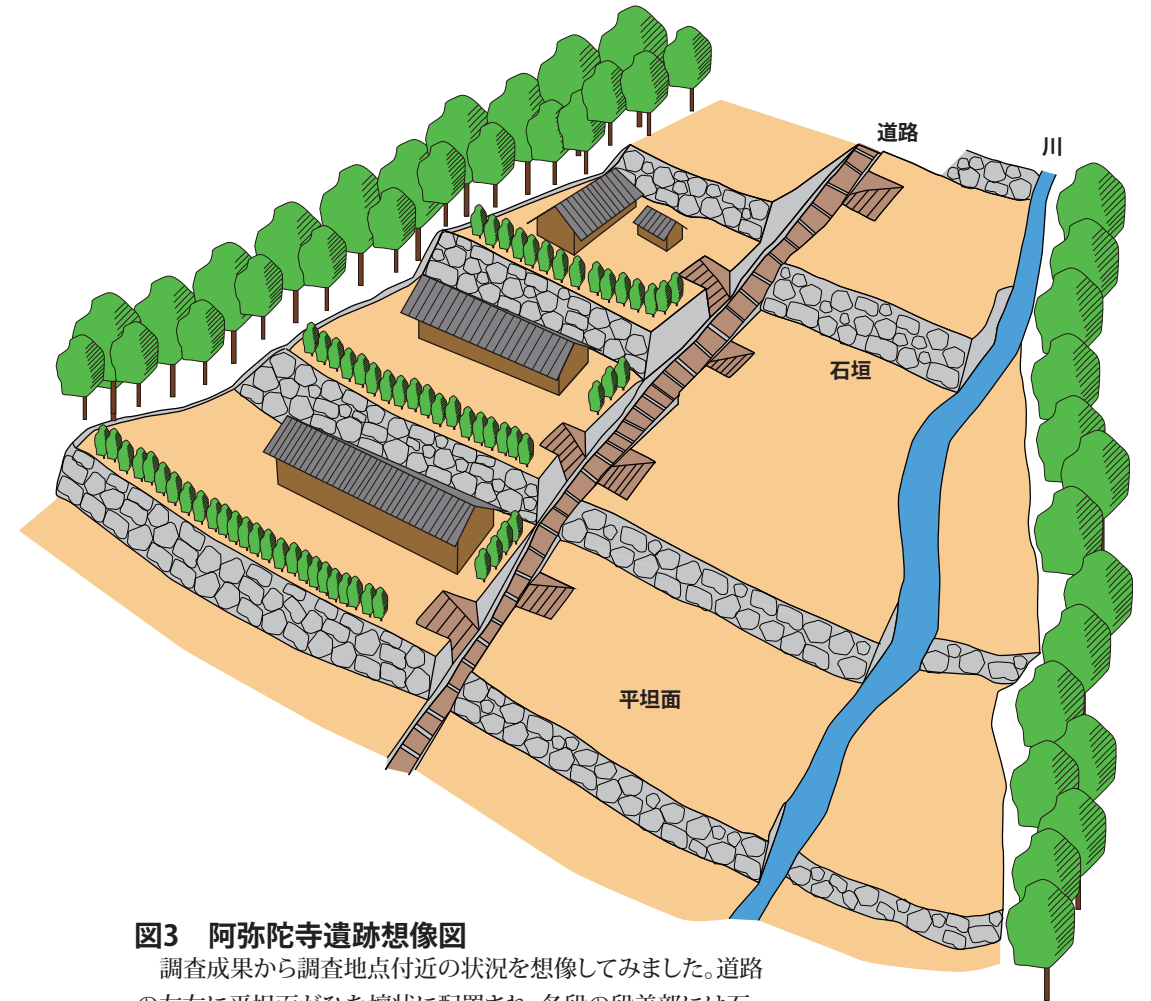


図3 阿弥陀寺遺跡想像図

調査成果から調査地点付近の状況を想像してみました。道路の左右に平坦面がひな壇状に配置され、各段の段差部には石垣が築かれています。ただ、平坦面上にあったはずの建物や平坦面の出入口等の詳細は不明なため、想像で示しています。



写真3 石垣の区分

石垣の検討

石垣を正面から見ると、その特徴から上のように大きく4つに分けることができます(写真3)。AとBは基底石^{きていせき}で、正面の面はきれいに揃えてありますが、Aは上端のラインもほぼ揃えてあるのに対して、Bは凹凸があり、石材もAより一回り小さくなっています。CとDは石垣の裏込めだと思われませんが、Cはほぼ均等な大きさの石が積まれているのに対して、Dはかなり大きめの石を含み、積んだというよりも崩れたような印象です。

このような状況が生じた理由として、石垣の崩壊に伴う改築が考えられます。今のところ、Aは本来の状態、Cは本来の状態から表面の石だけが落ちた状態ではないかと見られます。B・Dについては、もともとはAとBの境目で石垣が奥に折れていて、大岩1と大岩2を結ぶ面に石垣が構築されていた可能性があります。それが崩壊したものがDに見られる大きめの石で、崩壊後にその前にBを並べ、後ろの崩壊した石を裏込めに転用して埋めてしまったのではないかと考えています。Dの石材の間や土からは15世紀末から16世紀前半の遺物が出土しているので、Dが埋められたのは16世紀前半以降、A・Cはそれよりも前に構築されていたと思われます。

まとめ—山岳寺院から城郭への石垣構築技術の導入—

城郭への本格的な石垣の導入は安土城築城からとされていますが、近江ではそれ以前から石垣を持つ城が築かれてきました。しかし、^{かんのんじじょう}観音寺城の^{いしがきぶしん}石垣普請を^{こんごうりんじ}金剛輪寺に求めた記録(1556年)が残っていることから、^{すいけいおかやまじょう}その頃、優れた石垣構築技術を持つ工人集団は有力寺院の支配下にありました。近江八幡市域では、^{すいけいおかやまじょう}水荃岡山城(1508年～1525年)で、城郭としては近江でも最初期の石垣が築かれていますが、阿弥陀寺遺跡の石垣とは積み方や規模がよく似ており、出土遺物の時期も一致します。つまり、観音寺城よりも数十年も前の岡山城築城に、阿弥陀寺の石垣を構築した工人集団が関係している可能性があるのです。「穴太衆」に代表される近江の石垣構築技術者集団は、地域ごとにいくつか存在したと想定されています。今回確認された石垣は、安土城以降に完成される城郭の石垣構築技術の原型の一つと言えます。今回の調査を通じて、近江の山岳寺院から城郭へ石垣構築技術が取り入れられていく過程を示す、重要な知見を得ることができました。

表1 阿弥陀寺の歴史と関連する主な出来事

時代区分	奈良時代以前	平安時代～鎌倉時代	室町時代～戦国時代	安土・桃山時代	江戸時代	明治時代～令和
主な出来事	仏教伝来(6世紀前半)	794年 平安京遷都	1467年 応仁の乱	1571年 比叡山焼き討ち 1579年 安土城完成 1600年 関ヶ原の戦い		1868年 明治改元 1939年 第二次世界大戦
阿弥陀寺の歴史	大島・奥津島神社建立(時期不明)	865年 阿弥陀寺建立	今回発見した石垣はこの時期!	1571年 阿弥陀寺焼き討ち	平坦地を畑に転用?	第二次世界大戦前後まで畑として利用 2022年 発掘調査開始

8世紀

14世紀

16世紀

19世紀